説教余滴 2021 年 1 月 24 日、「不如意」

神さまは、意志薄弱でいて頑固、強情な私を打ちたたくようにして働かせました。まだまだ働くぞ、と考えると、もうそこまでで良い。いつもそうでした。
私の希望とは正反対な道を備えられました。卒業の年、九州教区を希望しました。同級生が次々と任地が決まる中、学長から呼ばれました。「申し訳ない、例年九州から求人が来るのに、今年に限って一つもない。探している。もう少し待ってほしい。」四月、新入生が来ます。寮の部屋替えが行われます。「さあ、どうなるのかなあ。」四月末、東京の教会の牧師と学長室で会いました。君の希望とは違うが、やってみないか。これは学長。
選択の余地はありません。主なる方の考えは、判らなくても従うしかありません。
召されることは派遣されること。宣教学では、カソリック教会へ行き、レポートしました。
ドイツ人司祭はこんなことを話してくれました。「私には故郷に親しいプロテスタントの牧師がいます。彼は、私にはない素晴らしい家族がいます。美しく聡明な奥さんと子供たち。帰国して彼らと会うのが楽しみです。私には彼にないものがあります。命じられれば直ちに、いつでもどこへでも行くことのできる自由です。」

1941 年、日本基督教団が成立しました。それまでの旧メソジスト教会は、監督制を取り、牧師は二年ごとに派遣されていました。荷物を少なくして、いつでもどこへでも、移動する備えをしていました。定住すると荷物が増えます。派遣されたら、いつまでもそこで働く気持ちでいなさい。しかしいつでも移動する命令に応える姿勢でいなさい。母教会で学びました。無教会の塚本虎二先生は、自分が選び取りたいと願うことと真逆の道を選びなさい、そうすればたいていの場合、神さまのみ旨に適うものです、と語っておられます。意の如くならないところに神のみ旨が示されています。自分の思い通りになっている時は、サタンが顔をのぞかせています。